



Title	オーストラリアコプト人の宗教的实践と理念
Author(s)	村上, 優子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49152
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	村 上 優 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 2 1 7 1 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学 位 論 文 名	オーストラリアコプト人の宗教的実践と理念
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 春日 直樹 (副査) 教 授 中川 敏 教 授 栗本 英世

論 文 内 容 の 要 旨

コプト人は、オーストラリア風に言うならば、「エジプト・オリジンの」人々である。彼らの多くはエジプトに住んでおり、今となってはエジプトではマイノリティとなってしまったキリスト教、それも大半は、キリスト教の中でもマイノリティであるコプト正教会の信者である。世界的には、マイノリティだが、イスラーム世界におけるキリスト教としては最大規模である。いずれにせよ、通常のカテゴリで行けば「マイノリティ」に分類されるが、彼ら自身は必ずしもそうは思っていない。異なっているのは彼らではなく、その「外」の方なのである。

1940 年代以降、エジプトからの国外流出が始まり、現在、アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国、カナダ、オーストラリアといった西洋諸国を中心に、世界各地へと広がりつつある。移民した先で彼らは「自分たちの」教会を設立し、「母教会」たるエジプトの教会と交流しつつ、新しい土地で生活を営んでいる。

本稿は、そのうち、オーストラリアのアデレードに移民した人々が、教会に集い様々な活動を行う中で、新しい土地で改めて「私たち」というものを作ろうと試みる様子を描き出そうとするものである。また、逆に「それ」が「それ」である、とはどういうことか、より厳密には、「それ」が「それ」であると認識されるとはどういうことなのかを考察する。

「私たち」を作る…彼ら自身の感覚では「維持する」…活動にあつて、教会は非常に重要な役割を果たしている。ただし、この教会は、聖職者からなる組織のことではない。コプト正教会においては、全ての信者が教会自体を成している。教会の教会としての代表者は、確かに、修道士で占められている。しかし、だからといって決してそうでない一般信者に力がないわけではない。

彼らにとって教会や宗教とは決して特別な何かではなく、生活そのもの、というに近い。もちろん、諸々の宗教儀礼があり、それは日常生活とはまた異なるものである。しかし、より大きく見て取るならば、宗教を別個に分離して見るよりは、むしろ生活と一体化したものとして捉える方がより実情に近いであろう。彼らにとって、生きること、生活すること自体が宗教実践であり、また宗教実践とは、生活することに他ならないのである。もちろん、理想的なあり方、より良い実践の仕方、というものは存在する。しかし、理想からかけ離れた状態にあったとしても、なお、同一軸上に存在する。

これ故に、コプト人であることとコプト正教徒であることもまた、非常に深く、分かちがたく結びつくことになる。キリスト教、という点では、コプト正教会は、コプト人であるか否かに全く無関係な存在でもあり得るはずであ

る。しかし、彼らの感覚においては、そうではない。やはり、コプト正教会はコプト人、即ち、エジプト人のものである。

とはいいいながら、「コプト人」とここで呼称している一群の人々が、一枚岩であるかといえ、決してそうではない。それが如実に出るのが、海外教会である。

例えば私が調査したアデレードのコプト教会の場合、出身国がまず異なる。一部のコプト人たちは、イギリス及びエジプトによるスーダンの共同統治時代に「読み書きができる官吏」としてスーダンへ送り込まれており、その子孫が流出して来ている。エジプトとのつながりは保たれて来たものの、それでも、エジプトから来た人とスーダンから来た人との間には温度差のようなものが存在する。また、それ以外の国から来ている人も少数ながら存在する。同じエジプトであっても、上エジプトと下流の方にある都市部の出身者ではまた異なる。社会的背景の違い、世代の違い、さらには、移民時期の違いによっても差異がある。その意味では、この教会は、「寄せ集め」という側面を持っており、またそれは、自覚されてもいる。

それでもなお、彼らは皆、同じ教会の構成員である。「寄せ集め」の彼らは、各々持てるものを持って教会へと集まり、教会を組み上げて行く。物質的なものだけではない、技術や人脈、アイディア、労力等々、様々なものが持ち寄られる。その中には、新たにオーストラリアへ来て獲得したものも入っている。たとえて言うなら寄せ木細工のようなものである。ただし、何かを完成させようと意図されているわけではないことを付け加えておかななくてはならない。持ち寄り、組み上げ作業をすること自体に意味があるのである。

簡単に各章の紹介をしておきたい。1章は、調査地となるアデレードの概要及び調査の概要である。2章では、聖マリア・聖ビショイコプト教会について、教会の様子及び実際の活動風景の一端を特に日曜日の朝の光景を中心に述べている。本来ならば、先にまとめた情報を出すべきところではあるが、それを行うことで不要な固定化が起こるのを避けるため、あえて先に実際の状態を述べた。3章は、主としてコプト正教会に関する基本的な情報及び現状に関する話である。4章は再びアデレードの教会へと話を戻し、宗教儀礼ではない活動に焦点を当てている。主な内容は、日曜学校と祭日などの折に行われる劇、そして「エジプト・プロジェクト」と呼ばれていた教会の庭を用いたプロジェクトに関する話である。5章では、彼らにとっての「エジプト」という「地」について検討しつつ、1～3章の内容を受け、彼らの「組み上げ」作業をとそこで編まれているものについて考察する。5章が彼ら自身の「内側」の活動を検討するものであるとすれば、6章は逆に外との関係において考察するものである。普段、彼らは極普通に「一市民」として生活をしている。特に目立つということもない。オーストラリアで一般的な価値観や世界観は、彼らのそれとは必ずしも一致せず、しばしば大きな齟齬を含んでいる。時にそれは彼らをはがかりとさせるが、それでも、上手く自らを保ちつつ、生活をこなしている。それを可能にしているのが「信じる」という言葉である。そしてまた、この言葉により、彼らは「異なるもの」の間に自分たちの相対的位置と価値を見出して行く。第7章は、彼らの今ひとつの特徴、「沈黙」について取り扱っている。様々なことに対し、彼らは沈黙する。それは6章に引き続き、異なるものとの間をこなして行く方法の一つである。優しいとは言えない運命に、しばしば独特の沈黙をもって受動的ではあるが非常に強固な抵抗を示す。他方、それに変化が起ころつつもあり、不安定な国際情勢の中で、揺れ動いていることをあわせて記した。

論文審査の結果の要旨

本論文は1998年10月～2001年4月の期間に、申請者がオーストラリアの都市アデレードにおいて調査したコプト人移民をめぐる民族誌である。論文は次の2点において、高い価値を有する。1点目は、コプト正教会の実態に関する希有な人類学的調査であり、とくにエジプト・スーダンでの差別や迫害から逃れて海外に移住したコプト人に関しては、最初の民族誌として発表された点である。2点目は本論の方法論にかかわる。コプト人たちは移住先で複数の家族が同居したり近隣集団を形成したりすることはなく、仕事・生活のために緊密なネットワークを築くこともしない。年々と新参加者が加わり、オーストラリア育ちの比率が高くなる中で、彼らはいかにしてコプトとして在りつづけるのか。著者はこの問題を「カテゴリー・イメージ」という観点から明らかにしようとする。

「カテゴリー・イメージ」は、エスニック研究で影響力を保持するフレデリック・バルトの議論に対する批判として提起される。ある人々のカテゴリーの存在を境界 (boundary) に焦点を当てて分析するバルトの手法は多くの研究者によって活用されてきたが、コプト移民の状況を理解するには不十分である、と申請者は述べる。彼らの境界は決して明確でなく、微妙な変動に不断にさらされている。境界の重要視とは、文化が場所に根ざし場所の制約を受けるという旧来の思考を受け継いでおり、「越境する文化」という流行の表現もこの観念を免れていない。境界の概念に固執するかぎり、文化とローカリティの因襲的な絆から自由になるのは難しいのではないか。そこで著者が提起するのが「カテゴリー・イメージ」である。人々はカテゴリーの境界を曖昧にしたまま、何らかのイメージの喚起をつうじてカテゴリーをカテゴリーたらしめ、「私たち」でありつづける場合が多い。申請者はこうしたイメージが喚起される様態を、移民たちがアデレード郊外に建てたコプト正教会に注目して明らかにする。

移民たちが金を出し合って建設したこの教会には、約 100 のアデレード在住の移民家族が何らかの形でかかわりをもつ。教会では洗礼やミサやコンミュニオンや告解などの重要な儀礼が行われるのみならず、日曜学校、バザー、勉強会、料理の見習い、おしゃべりなど社交や教育の場が供され、さらには教会を母体にした戸外でのピクニックやキャンプ、各家庭でのホームパーティなど幅広い活動が展開されていく。ただし、教会はボランティアによって成り立っており、活動に熱心な人々がコプトとしての価値観や実践を同じコプト人に対して声高く主張することはない。教会の外部に対しても同様で、オーストラリアでさらされる偏見も、エジプト本国で受ける弾圧についても、積極的に語ることも声を上げることもしない。

それでいて彼らは、教会の諸活動をつうじて聖なる地エジプトを各自がイメージしつづける。ゲストによる講演に涙し、聖書劇の自主上演に励み、聖家族のエジプト行を展示するプロジェクトには個々人が協力を惜しまない。こうした活動をつうじて、彼らはファラオの系譜を引き、長い迫害に耐えて今日につながるキリスト教徒として「私たち」でありつづける。彼らは明確な制度や強力な機関を創設することはなく、さらに相互のネットワークを強く張りめぐらすこともないが、「カテゴリー・イメージ」の喚起によって周囲の価値観との衝突をコプトにふさわしい形で回避し、コプト人としてよりよい生活の実現に努めている。

このように、申請者はコプト移民についての世界最初の民族誌を、世界規模の人口移動、ホスト社会における関連制度の不備、出身地にあった社会諸関係の不在という状況において「カテゴリー・イメージ」を鍵概念として斬新な姿で提示している。博士学位の授与に十分に値する論文であると判断する。